

一橋大学審査博士学位論文

「アドルノにおける言語・自由・道徳——哲学的著作と音楽論の横断的読解を通して」

要約文

本論文は、アドルノ(Theodor Wiesengrund Adorno, 1903-69)の言語哲学および実践哲学にかかわるアイデアを再構成することを目的とした。言語哲学と実践哲学という両領域はたんに並列的に考察されるのではなく、アドルノの哲学的思考の核心を共有したものととして包括的に考察された。その核心を要約すれば、《対象との特定の関係に身を置きその対象の来歴を辿ること》の重要性を強調する、ということである。言語哲学的観点から言えば、対象の来歴を辿るためにはその対象に適用される概念を歴史的・社会的文脈のなかで理解しなければならないということを本論文は主張した。この主張は、概念は私たちの実在とのかかわりから独立に自己完結した領域を形成しているのではないという《概念領域の自足性批判》を含意する。実践哲学的観点から言えば、対象との特定の関係に身を置くことによって主体は自らのあり方や行為を制約されるが、そうした制約そのものは不自由を意味しないこと、むしろ主体の意のままにならない対象との関係のなかで達成される自由の構想があることを本論文は主張した。この主張は、道徳理論は主体の巻き込まれた現場から独立に自己完結したものととして組み立てられるものではないという《道徳理論の自足性批判》を含意する。本論文が試みたのは、アドルノの著作からこのアイデアを引き出し、その言語哲学上および実践哲学上の魅力と射程を示すことである。

## 序論

序論では、まず上記の問題設定を、アドルノ解釈における言語哲学および実践哲学上の先行研究をまとめつつ提示した(0.1「問題」)。ついで、アクセル・ホネットの『権力の批判』でのアドルノ批判を取り上げつつ、本論文で問題にする論点を整理し、それに沿って本論文の解釈方針と構成を明示した(0.2「論点」)。さらに、アドルノの音楽論を哲学的な仕事と切り離すことなく評価し、音楽論の読解から実質的な哲学的アイデアを発掘する、という読解方針を提示した(0.3「方針」)。具体的には、本論文では、アドルノの音楽形式論から概念理解の重要なアイデアを(1.3)、音楽分析論からアドルノの反デカルト的思考を(2.2)、音楽素材論および不定形音楽の議論から自由の構想を(3.1 および 3.2)、それぞれ引き出した。これらはいずれも、なんらかの抽象的な議論を具体的に説明するためだけに参照されるのではない。むしろ、音楽論を哲学的著作と同じ水準で(そこから言語哲学と実践哲学について有益なアイデアを引き出すことのできる議論として)読解することができる、ということを示した点に重要性がある。最後に、本論文の構成を提示した(0.4「構成」)。

## 1 概念

第1章(「概念」)はアドルノの概念論に含まれる規範的アイデアを再構成した。この課題設定は、従来のアドルノ解釈で主流だった、《アドルノは概念道具説(概念的思考を道具的支配と同一

視する見解)を主張し概念的思考を全面的に批判している」という全面批判解釈を否定し、「アドルノは概念そのものや同一化する思考そのものではなく概念のある特定の使用法や同一化する思考のある特定の形態を批判している」という限定批判解釈を採ることを含意する。この課題を果たすために、以下の流れで議論を組み立てた。

## 1.0 問題設定——概念把握することの規範的側面を再構成する

まず、本章の問題設定を確認した(1.0「問題設定——概念把握することの規範的側面を再構成する」)。アドルノの概念論に含まれる規範的アイディアを再構成するという課題に取り組んでいる先行研究は近年いくつか出ているが、そこにはなお議論すべき論点が残っている。その論点は二つ挙げられる。第一に、概念道具説とアドルノの距離についてであり、第二に、よりよい概念的思考のあり方をめぐる問いの立て方についてである。

第一の論点については、アドルノの概念理解の両義性を示すことで、アドルノが概念道具説を抽象的に否定しているのではないことを明らかにした(1.0.1「概念道具説に対するアドルノの両義的態度」)。すなわち、一方でアドルノは概念道具説の不十分さを自覚しつつ、他方で概念の道具的側面が優位になる状況とそれとは別の概念的思考のあり方を考えていた。概念道具説とアドルノの距離は、いわば三次元的に理解する必要がある。第一に、たしかに、概念道具説は概念のあり方そのものの捉え方としては一面的である。さらに第二に、「アドルノは概念道具説をまったく主張していない」と解釈することはもちろんできない。これらの点において、本論文は全面批判解釈に部分的には同意する。しかしながら、概念の道具的性格についてのアドルノの理解はあくまでも両義的なものであって、それゆえ第三に、「アドルノは概念道具説の一面性を自覚しつつ、そうした一面性が優位になる状況とそれとは別の概念的思考のあり方を考えていた」と考えなければならない。そして、この両義性を正確に捉えるためには、全面批判解釈を拒絶して限定批判解釈を採らなければならない。

この点が第二の論点にもかかわる。よりよい概念的思考のあり方をめぐっては、「何か」「いかにしてか」「なぜか」の三つの問いを立てることができる。それぞれに対して本論文は以下のように答えた(1.0.2「概念的思考の規範的探究に向けた問題設定」)。「よりよい概念的思考とは何か」という問いへのアプローチのしかたは、境界画定的ではなく反省的である。すなわち、この問いにアドルノを経由して取り組むばあい、「よりよい思考」を「よくない思考」から弁別できる基準を求めることは誤っており、よりよい概念的思考の探究は「ある個別的な対象についての思考のあり方を当の思考自身が吟味する」という反省的構造に依拠して進められる。したがって、よりよい概念的思考の必要十分条件を定式化することが目指されるのではない。このことは、「なぜよりよい概念的思考をすべきなのか」への答えからの帰結である。すなわち、アドルノは個別的なものの理解という観点からの望ましさを理由に、よりよい概念的思考を要請している。この望ましさは、ここで結論だけ先取りすれば、ある個別の対象に時間をかけて関与しているか、その対象の来歴を辿っているかという観点から評価される。この「なぜ」問題への解答から、「いかにして」問題にかんする帰結が導かれる。すなわち、望ましい概念的思考は、成文化された規範に依拠してトップダウン型でなされるのではなく、

同一化が生じるそのつどの場面から出発してボトムアップ型でなされる。そして、概念が道具的に使用され流通する現場こそが反省的構造に依拠したボトムアップ型の探究の資源を提供すると考えられているがゆえに、概念の両義的な理解が必要になるのである。

### 1.1 アドルノの概念論理解のための予備的議論——問題の共有と媒介概念の含意

それから本論に入り、アドルノ読解を通してこれらの論点の内実を提示した。まず、アドルノの概念論理解の準備作業として、《個別的なものよりよい認識》という問題設定の確認、《概念の被媒介性》という媒介概念の含意の確認、という二つの確認作業を行った(1.1「アドルノの概念論理解のための予備的議論——問題の共有と媒介概念の含意」)。これらの作業は次節の議論の前提となる。

まず、『否定弁証法』「緒論」の「哲学の関心」と題された節を読むことで、次節 1.2 で読解対象となる箇所を明らかにした。こうした文脈明示化の作業の成果として、概念論の問題設定の背後にある、《個別への関心》と《観念論の放棄》という二つの動機を提示した(1.1.1「概念をめぐるアドルノの問題設定の共有」)。こうした動機に導かれて掲げられるのが、「認識のユートピア」というアドルノの認識論的企図である。本章が全体として目指したのは、このアドルノの企図を真剣に受け止めるために必要な材料を提示することである。

さらに、もうひとつの準備作業として、アドルノ独特の媒介概念の含意を明らかにした。アドルノの概念論において「媒介」という概念はもちろん重要な役割を果たすのだが、アドルノはそこで、《媒介するもの》が《媒介されるもの》によって媒介される、という入り組んだ関係をも考えている。これは、概念的領域の自己完結性という観念を破壊するためのアイデアであり、これもまた、「概念の脱魔術化」節の理解の助けとなるものである(1.1.2「媒介概念の含意」)。

### 1.2 概念のあり方の向きを変える——概念理解の実質的アプローチ

ついで、『否定弁証法』「緒論」の「概念の脱魔術化」と題された節の読解を通して、アドルノの概念論の核心にあるアイデアを引き出した(1.2「概念のあり方の向きを変える——概念理解の実質的アプローチ」)。そこでは、アドルノの概念理解を《概念理解の実質的アプローチ》として提示した。議論の流れは以下の通りである。

まず、アドルノの「媒介」概念を踏まえた概念理解を示すために、概念と非概念的なものの関係を論じた(1.2.1「概念と非概念的なものの関係」)。ここでのポイントは、《概念と非概念的なもの》という二項関係を、概念から非概念的なものへの一方向的な指示関係としてではなく、概念が非概念的なものによって媒介されているという(1.1.2 で確認した)アドルノ独自の含意をもつ媒介関係として理解すべきである、ということである。つぎに、これを踏まえて概念理解の「実質的アプローチ」を提示した(1.2.2「概念理解の実質的アプローチ」)。概念理解の実質的アプローチとは、概念を、人間の実践から切り離された自足的な体系として理解するのではなく、それが形成・使用・改訂されほかの概念と結びつく社会的・歴史的・実践的文脈のなかで理解する考え方である。この考え方は、概念領域の完結性を支持する観念論を拒絶するという問題設定にとって重要である。さらに、

アドルノの主張に見られる両義性を指摘した。すなわち、アドルノは、概念の形式的理解を拒絶しつつ同時にこうした形式的理解の社会的必然性が存在することをも説明するのである(1.2.3「概念理解の両義性」)。このことを受けて、この両義性が概念物神崇拜の回避策として要請されることを示した(1.2.4「概念物神崇拜批判」)。最後に、アドルノの両義的な概念理解の決定的理由として、概念が形式的に理解され使用される場面が概念の実質的理解のための資源を提供しているというアドルノの考えを示し、それによって、概念理解の両義性と概念的思考の反省的構造が論点として接続していることを明示した(1.2.5「概念の実質的理解の再帰的性格」)。

### 1.3 音楽形式論を言語哲学的に読解する

さらに、こうした概念論がアドルノの音楽形式論にも見出されることを指摘した(1.3「音楽形式論を言語哲学的に読解する」)。その議論は以下の通りである。まず、音楽上の概念にもまた歴史的連関があり、それゆえに実質的に理解することが可能であることをアドルノの音楽形式論から示した(1.3.1「音楽上の概念の歴史的連関」)。ここで重要になるのは「形式」と「図式」の区別であるが、1.2.2 で示した区別を適用すると、「形式」とは実質的に理解された音楽上の概念を、「図式」とは形式的に理解された音楽上の概念を指す(「形式」という言葉の意味が概念理解について言われる「実質的／形式的」とずれていることに注意が必要である)。つぎに、このように実質的に理解された音楽上の概念の適用によって達成される音楽理解の内実を、アドルノのヴェーベルン解釈を例に提示する(1.3.2「実質的に理解された概念使用による作品理解——ヴェーベルン解釈を例にして」)。そこでは、アドルノが「ソナタ」という概念を実質的に——歴史的連関のなかで——理解することによって、「図式」としてのソナタを適用できないヴェーベルンの作品に「形式」としてのソナタ概念を適用していること、そしてそれによって、ヴェーベルンの作品を諸作品のネットワークのなかに新たに位置づけていることが示された。こうした対象の来歴・ネットワークは、形式的に理解された概念の適用によっては取り逃されることになる。最後に、このような実質的に理解された概念の適用による作品理解をアドルノが「概念把握すること(begreifen)」と呼んでいることを確認した(1.3.3「音楽作品における「概念把握すること」」)。これは音楽形式論から引き出せるアドルノのアイデアがアドルノの概念論と密接に関連していることを示しているという点で重要である。以上の読解によって、音楽作品の理解のためにもまた音楽についての概念を実質的に理解することが必要であるということを示し、前節の議論の内実をより豊かに示した。

### 1.4 対象に密着する思考

最後に、音楽形式論の文脈で用いられる「概念把握」の規範的含意を踏まえつつ、アドルノにおける「概念把握」の規範的な役割および認識論的含意を明らかにした(1.4「対象に密着する思考」)。具体的には、「布置(Konstellation)」の概念を手がかりとして、〈対象からの要請としての規範性〉という考えに取り組んだ。議論の流れは以下の通りである。まず、よりよい概念的思考のために求められるのが対象の側からの要請に応じた概念使用であることを示した(1.4.1「対象の側からの要請としての規範性」)。この〈対象の側からの要請〉という考えこそが、概念的思考の反省の出

発点を示すものであり、かつ、個別的なもののよりよい認識という問題設定における「よりよい」という評価を支えるものである。つぎに、このような対象の側からの要請としての規範性が、けっして現状肯定を意味せずむしろ現状肯定的態度への批判を意図していることを示した(1.4.2「現状肯定的態度の拒絶」)。さらに、対象からの要請に応じることがいかにして現状に対して批判的に振る舞いうることになるのかということ、「個別的なものの内在的普遍性」という観念から説明した(1.4.3「個別的なものの内在的普遍性」)。本論文は、この普遍性の構想を、「対象への実践的関与を通じて習得した概念使用によって正当に評価することが可能になる対象の来歴」として提示した。このような来歴を正当に評価することによって私たちの現状の認知的枠組みは揺さぶられる。対象からの要請に応じる思考が現状に対して批判的でありうるのはこの点による。最後に、対象をそのようなしきたりで認識することが、概念能力と感受性の同時的発揮として理解可能であることを示した(1.4.4「概念能力と感受性の同時的発揮としての概念把握」)。アドルノが「概念把握すること」という言葉に込める規範的な含意はこの点に見出せる。以上の作業によって、「認識のユートピア」というアドルノの認識論的企図を真剣に受け止めるために必要な材料を提示した。

## 2 叙述

第2章(「叙述」)は、第1章で提示したアドルノの概念論の規範的アイデアを展開し、その言語実践上の帰結を引き出した。本論文はとりわけ「叙述」および「弁証法的思考」をめぐるアドルノの議論に依拠することでこの課題を果たした。重要なのは、前章で取り上げた「布置」概念の言語実践的含意である。概念的布置とは《対象の来歴を辿るなかで形成される、実質的に理解された概念のネットワーク》と要約できる。アドルノはこうした布置的概念使用を強調した意味で「言語(Sprache)」と呼び、さらにそうした言語による布置形成的実践を「叙述(Darstellung)」と呼ぶ。本論文はアドルノのこの「叙述」のアイデアを「密着のプロジェクト」と呼んだ。

### 2.0 問題設定——哲学をカプセルに包むことなく言語論的アイデアを展開する

まずは講義『弁証法入門』の発言に依拠して、アドルノが〈哲学と個別科学の分離〉という考えを拒絶していることを確認した。そこでのポイントは、個別科学との連関を維持する哲学の役割が事柄の「実質的な(material)認識」にある、ということである。そこでさらに、『否定弁証法』の発言に依拠して、対象の実質的認識に到達するアドルノの哲学の構想を理解するための鍵概念が「叙述」であることを示し、本論の準備とした。

### 2.1 デカルト的方法論批判から弁証法的思考へ

「密着」という語は、アドルノがデカルト的方法論との対決を通して弁証法的思考の特徴を描き出す議論から取られたものである。アドルノが批判する物象化された学問的思考はまさしく表象のプロジェクトとして理解できる。デカルトの『方法序説』第二部の四規則へのアドルノのコメントを読解することで、本論文は弁証法的思考を密着のプロジェクトの核心にある特徴として提示した(2.1「デ

カルト的方法論批判から弁証法的思考へ)。その作業の成果は、第一に、弁証法的思考を《対象に密着する思考》として描くことであり、第二に、その内実を理解するうえで分析に対するアドルノの両義的評価の重要性を示すことである。

議論は以下のように進む。まず、アドルノのデカルト読解を理解する前提として、その読解姿勢に見られる修辭的性格を指摘した(2.1.1「アドルノの修辭的な読解姿勢」)。このことを確認したうえで、アドルノの四規則解釈を順番に見ていった。まずアドルノは、四規則の提示に先だってデカルトが導入部として書いた箇所を読解し、そこに見られる《思考の首尾一貫性》という考えを支持しつつ同時に《対象に密着すること》を要請する(2.1.2「四規則の導入部——「決心」」)。第一規則(明晰判明)については、アドルノは、《自律的思考の重視》という点でデカルトに同意しつつ、やはり同時に、その背景に潜む《無時間的に妥当する真理》という観念は拒絶する(2.1.3「第一規則(明晰判明)——「速断を避けて」」)。第二規則(分析)については、対象の認識が分析なしでは済まないことを認めつつ、同時に、要素への還元によって対象の認識が果たされるとみなす要素物神崇拜は拒絶する(2.1.4「第二規則(分析)——きめ細かいものへの憎悪」)。ここまでで分かるように、アドルノのデカルト読解の姿勢には、たんなる抽象的否定では済まない両義的性格がある。しかし、第三規則と第四規則に対するアドルノの姿勢はほかと比べて否定的性格が強い。アドルノは、第三規則(総合)については、主観が想定する枠組みではなく「対象そのものの規定」を考えることを要請し(2.1.5「第三規則(総合)——「私は前提する」」)、第四規則(枚举)については、認識の完全性を保証する図式を引き合いに出す「認識の物象化」に反対するのである(2.1.6「第四規則(枚举)——認識の物象化」)。これらの論点をひとつのまとまりとして考察することで見えてくるのは、アドルノが、対象を無批判に受容せず批判的に吟味しながらもなお同時に対象との接触を——アドルノの言葉で言えば「密着」を——求めている、ということである。

## 2.2 弁証法的思考のモデルとしての音楽分析論

以上の読解の成果として、分析に対するアドルノの評価から、弁証法的思考の内実をより詳細に規定できる見込みが得られた。ここで言う「分析」には、学問的方法論や哲学的思考法における「分析」だけでなく、音楽作品の「分析」も含めてよい。というよりむしろ、アドルノが音楽分析について論じたことは弁証法的思考のモデルとして読解可能であり、そのように読解することによって、《弁証法的思考がいかんして対象に密着しうるのか》という前節の問いに別の方向から答えを与えることができる。そこで、アドルノの音楽分析論の検討を通して対象に密着する思考の中身をより充実させることが本節の目標となった。具体的には、音楽分析を主題とした晩年の講演「音楽分析の問題によせて」の読解を通して、弁証法的思考の内実を具体化することが目指された。

議論は以下のように進む。まず、音楽分析論読解の前提として、アドルノの分析に対する評価を確認した。アドルノは、デカルトからさらにさかのぼってプラトンに依拠することで、《対象に密着する》分析を構想していた。議論の準備としてまずはこのことを示した(2.2.1「自然のあり方にふさわしいように」——プラトンから継承する分析の構想」)。そのうえで、音楽分析論の読解に移った。ここでは、先の反デカルト的論点に対応するかたちで三つの論点が扱われた。第一に、要素物神崇

拝を拒絶しつつ分析の必要性を説いていること(2.1.4)と対応して、《作品の側から見た分析の必要性》が主張された(2.2.2「音楽作品は分析を必要とする」)。その要点は、音楽作品には分析によって展開されるべき来歴が折りたたまれていること、この来歴の展開のために音楽は聴取者に分析という特定の概念的節化を要求すること、この二点にある。第二に、認識の物象化に反対して「対象そのものの規定」を思考すること(2.1.5 および 6)と対応して、《分析の目標としての内在的普遍性》が主張された(2.2.3「分析は個別的な作品のなかにある普遍性の契機を探し求める」)。ここには第1章で検討した認識論的議論との同型性が確認できるが、その要点は、内在的普遍性とは《個別の作品との関係内部に身を置く「沈潜」を通してその作品が置かれた来歴・ネットワークを認識する「超越」を達成する》という二重運動によって獲得されるべき普遍性の構想である、という点にある。最後に、時間制約的真理観(2.1.3)と対応して、《生成の聴取に対する分析の貢献》が主張された(2.2.4「分析は生成の聴取に寄与する」)。音楽分析論としてはとりたてて注目するまでもないこの議論から、本論文は、《対象の連関を辿るための手続きは一般的なかたちで与えられているわけではない》というより射程の広いアイデアを引き出した。

### 2.3 弁証法的思考の言語論的含意

つぎに、弁証法的思考がもつ言語論的含意を展開した。具体的には、知識伝達の場面において言語が果たす社会的作用に注目し、アドルノの要請する弁証法的思考がこのような言語運用に対する矯正策となることを示した。

議論の流れは以下の通りである。まずは、『認識論のメタ批判』の「緒論」に依拠しつつ、アドルノの第一哲学批判読解のための導入として、アドルノの認識論理解を確認する(2.3.1「認識論と言語運用の問題の導入」)。認識論は懐疑論論駁という課題のために「絶対的に確実な第一のもの」を求める。アドルノはさらに、この課題を引き受ける第一哲学がそれによって「同一性の強制」と呼ばれる抑圧的作用をもたらす、と述べる。この点に見られるように、アドルノの認識論に対する問題意識は言語運用に対する問題意識と独特なしかたで絡まりあっている。その絡まりあいは知識の流通の背後にある社会関係に見出される。本論文はこのことを、「第一哲学」に対するアドルノの批判の修辭的な側面に注目することで引き出した。「第一哲学」とは、哲学史的な文脈ではアリストテレスの学問分類に由来する言葉であり、内容的には形而上学を指している。アドルノももちろんこの概念のアリストテレス的由来を踏まえているのであって、このことを無視してアドルノの第一哲学批判(それは多くのばあいフッサール批判である)を理解することはできない。しかし、本論文では、アドルノの第一哲学批判は学説そのものの批判としてではなくそれが社会的に行使してしまう権力作用の批判として読むことが有益であると考え、アドルノの第一哲学批判の修辭的な側面に焦点を当てた(2.3.2「第一哲学の修辭的解釈」)。そこでは、(a)本質と仮象の区別という水準では知識の解放的側面だけでなく抑圧的側面も問題になることが示され、かつ、(b)アドルノがこの抑圧的側面をとりわけ問題にするのは連続性と完全性という形式上の整合性が追求される伝達の場面であることが示される。問題をこのように明示化したうえで、最後に、『ミニマ・モラリア』などを参照しつつ、アドルノの要請する弁証法的思考が、第一哲学的思考の矯正策として(a)一方で本質と仮象の区

別を保持しつつ(b)他方で伝達のために効率化された言語運用を拒絶する思考として理解可能であることを示した。そしてそこから、〈知識の滞りない流通を支える論理的道具立てに対する懐疑〉という言語運用上の帰結を引き出した(2.3.3「第一哲学批判としての弁証法的思考」)。

## 2.4 密着する思考としての叙述

最後に、「密着のプロジェクト」の内実を明らかにした。「密着」という語はデカルト的方法論との対決を通して提示された弁証法的思考の核心となる特徴であった。本論文はここでさらに、「密着」という語を「表象」「喚起」との対比で用いた。

表象のプロジェクトとは世界を正しく写し取ることであり、そこでは対象の典型的な振る舞いが問われ、一般化と統合を通じた理論化が進められる(2.4.1「表象のプロジェクト」)。アドルノは表象のプロジェクトを学問的思考によってもたらされる物象化として批判する。この批判的動機は、従来「表象」として理解されてきた学問的テキストのあり方についての社会科学や人類学の方法論的反省と親和的である。本論文はアドルノの思考の輪郭を描くために、この社会科学や人類学の議論から生まれた「喚起」のアイディアを参照した。そこでもうひとつの参照点である喚起のプロジェクトが出てくる(2.4.2「喚起のプロジェクト」)。喚起は《世界を正しく写し取る》という認識論的イメージを拒絶し、現実の典型的なあり方に特権性を認めず、一般化・統合という理論化への貢献を目指さない。社会科学や人類学の方法論的反省から生まれた喚起のプロジェクトはアドルノの思考と共通する部分もある。しかし、テキストと現実のあいだに横たわる差異に対して敏感であろうとする感受性ゆえに、喚起のプロジェクトはもっぱら《現実がいかに語られているか》という点に関心を向け、現実についての内容ある認識をもはや問題にしない。この点に喚起のプロジェクトとアドルノの差異が見出される。そして、表象でもなく喚起でもないアドルノの叙述の性格を言い表すために、本論文ではデカルト的方法論との対決から取り出された「密着」という言葉を用いた(2.4.3「密着のプロジェクト」)。密着する思考は、対象の典型的な振る舞いを特権化せず、だからといって対象の語り方にのみ関心を向けるのでもない。そこでは、叙述についての何らかの意味での「正しさ」「的確さ」が問題になっている。このとき問題になっている「正しさ」を中立的観点から評価可能なものと見なしてはならない、というのがひとつの要点である。むしろ、ある叙述や表現が「正しい」と言われるとき、アドルノ的観点から問うべきは、その表現の主体に何が起きているのかということだ。このとき、もうひとつの要点として、主体が経験という現場に居合わせていることが叙述の正しさの不可欠要素である、という答えが与えられる。

## 3 自由

第3章(「自由」)はアドルノの自然支配概念から実践哲学上のアイディアを引き出した。本論文はとくに音楽論における自然支配概念、すなわち「素材」および「素材支配」にかかわるアドルノの議論に依拠することでこの課題を果たした。



### 3.0 問題設定——自然支配の考えから自由の構想を引き出す

まずは本論での議論の準備作業として、自然支配概念の理解の問題および芸術における自然支配概念の含意を考察する。『啓蒙の弁証法』における自然支配概念には歴史哲学的含意があったが、人間の歴史を暴力的支配の展開として描き出す還元主義的説明には多くの批判が寄せられた(3.0.1『啓蒙の弁証法』における自然支配概念)。この批判に対するひとつの応答として、自然支配概念を含めた『啓蒙の弁証法』の議論を、読み手に与える効果に焦点を当てて理解する修辭的解釈が近年では有力になっている。本論文はこの修辭的解釈の有効性を認めつつ、それでは汲み尽くされない自然支配概念のポテンシャルを提示するために、自然支配が暴力的でありながらも同時に自らの暴力性を批判的に反省するための資源を提供している、という両義性に注目した(3.0.2「自然支配概念の修辭的解釈とその問題」)。さらに、芸術における自然支配概念が「素材支配」として重要な位置を占めていることを明示し、素材支配概念から自由の構想を引き出す見込みがあることを主張した(3.0.3「芸術の領域における自然支配」)。

### 3.1 音楽素材論を実践哲学的に読解する

以上の準備作業を踏まえて、つぎに、「自分自身の強制からの自由」と呼びうるアドルノの自由の構想を、アドルノの音楽素材論の実践哲学的読解によって描き出した。この自由の構想は、《主体が自らのかかわる対象を意のままにすることができず、主体の行為がその対象に制約されている》という受動性をそのうちに含む自由として提示される。それは、直接にはなく、自由の構想の分節化を経て導出される。すなわち、《自明性の崩壊のなかで模索される自由》から《自立性と自発性を伴う自由》を経て、さらなる問題に応答するかたちで《自分自身の強制からの自由》を提示した。議論の流れは以下の通りである。まず、アドルノにおける自由の問題を概観し、それが同時に素材概念に注目する理由を与えることを示した(3.1.1「なぜ素材が問題となるのか」)。それから、素材概念を導入し問いを定式化した(3.1.2「素材概念の導入と問いの明示化」)。そこでは、作曲家の自由の構想は、たんなる無制約としての自由とは異なるものとして、素材からの意のままにならない制約によって可能になるものとして提示された。そのあと、アドルノの音楽論読解を通して、アドルノの三つの自由の構想を提示した。それは、第一に自明性の崩壊のなかで模索される自由であり(3.1.3「自明性の崩壊から模索される自由」)、第二に自立性と自発性を伴う自由であり(3.1.4「自立性と自発性を伴う自由」)、そして第三に、自分自身の強制からの自由(3.1.5「自分自身の強制からの自由」)である。以上の議論によって、まず(1)アドルノの自由のアイディアは《無制約な自由》から区別され、つぎに(2)《制約によって可能になる自由》と《目的と制約のあいだに内的関係が成立している自由》とが区別され、さらに(3)この目的と制約のあいだの内的関係が硬直化することによる《服従としての自由》と、そうした硬直化に陥らない《自分自身の強制からの自由》とが区別される。

### 3.2 自由のイメージとしての不定形音楽

以上の議論で本論文が示したのは、アドルノの芸術論における自然支配概念が、一方通行・二項対立的支配関係とはまったく異なる含意を、すなわち、《支配する主体(芸術家)が支配される対

象(素材)によって制約されるという過程を通して開かれる可能性」という含意をもつということである。このように解釈された自然支配概念からさらなる自由の構想を引き出すために、1961年の講演をもとにした論文「不定形音楽に向けて」を自然支配の問題の観点から読解した。

アドルノはこの論文で、「自由のイメージ」を《自然支配による自然支配の撤回》という事態と結びつけ、なおかつ、「自分自身の強制からの自由」として提示した。本論文は、不定形音楽の構想によって解答が与えられる自然支配の問題を、《自分がなしたことやつくったものが自立化し自分自身を制約する》という問題として定式化した。議論の流れは以下の通りである。まず、不定形音楽の構想の輪郭を、《抽象的形式の拒絶》と《連関の内在的構成》という観点から描いた(3.2.1「不定形音楽の構想——抽象的形式の拒絶と連関の内在的構成」)。

ついで、自然支配の問題の観点から、アドルノが考察した戦後前衛音楽の二つの動向、セリー音楽(3.2.2「セリー音楽の内在的矛盾」)とケージの音楽(3.2.3「自然支配に反抗するケージの試み」)の問題を示した。不定形音楽はこれらの動向に対するオルタナティブとして理解できる。最後に、歴史的参照点として「無主題的音楽」に言及するアドルノの議論に依拠しながら、不定形音楽の構想がいかなる点で自由のイメージたりえているかを示した(3.2.4「歴史的参照点としての無主題的音楽」)。

そこでの読解作業の成果として取り出されたのは、《生成としての自己の開示》というアイデアである。アドルノは、このような生成としての自己開示が、一方では自分自身のまとまりの創出であるという意味で自然支配的性格をもちながら、他方で同時にそのまとまりがつねに他者——それは一般的な他者ではなく特定の関係において私に迫り私を混乱させる他者である——に対する感受性の発揮によって達成されるという意味で自然支配に反対するものでもあると考えている。このアイデアは芸術の領域固有のものとして神秘化して理解する必要はない。むしろ、自己を他者へと開いていくことで達成される自由という実践哲学的アイデアを不定形音楽の構想から引き出すことができるという点に、アドルノの音楽論の豊かさが示されている、とすべきである。

## 4 道徳

第4章(「道徳」)は、アドルノの道徳哲学をめぐる議論を再構成した。この再構成作業はアドルノにおける《善の構想の不在》と《規範的主張の存在》とのあいだの緊張、いわゆる「規範性の問題」を指摘することから出発する。

### 4.0 問題設定——否定主義と規範的主張のあいだの緊張を解きほぐす

規範性の問題は、アドルノの批判が規範的に基礎づけられていないことを非難する文脈でしばしば指摘されてきた。アドルノが『否定弁証法』で提示した「新しい定言命法」を参照してこの問題の原型を確認することが第一の準備作業であり、「新しい定言命法」の内容理解をめぐる問題とそれに対するアプローチのしかたを確認するのが第二の準備作業である。

第一の準備作業のために、アドルノにおける《善の構想の不在》と《規範的主張の存在》とのあい

だの緊張を指摘した。この緊張の所在は、典型的には、アドルノの二つのよく知られた発言を参照することで粗描することができる。それは、『ミニマ・モラリア』のアフォリズム第 18 番の末尾に置かれた「誤った生のなかで正しい生はない(Es gibt kein richtiges Leben im falschen.)」(GS 4, 43)という命題と、『否定弁証法』第三部「形而上学への省察」の、「形而上学と文化」と題された第二節冒頭に置かれた「新しい定言命法(ein neuer kategorischer Imperativ)」である。まずは、アドルノ解釈上でのこの問題の扱い方を参照しつつ、この「新しい定言命法」がいかなる意味で「正しい生はない」というテーゼと緊張関係にあるのかを考察し、その緊張を解決するために取りうるアプローチを確認した(4.0.1「規範性の問題の定式化に向けた予備的考察」)。

第二の準備作業のために、「新しい定言命法」の内容理解をめぐる問題とそれに対するアプローチのしかたを確認した。この「新しい定言命法」をめぐるまず問わなければならないことは二つある。すなわち、この「新しい定言命法」は(1)いかなる意味で「新しい」と言われるのか、そして「新しい」と言われるにもかかわらず、(2)なぜ「定言命法」と呼ばれるのか、という問いである。問題は、「新しい」と「定言」の連言の説明の難しさにある。この困難は、それ自体がアドルノの道德哲学の構想——道德哲学とはどのようなものである(べき)かについての考え方——を示している。すなわち、「新しい」と「定言命法」という一見して両立困難な二つの表現の連言は、アドルノが道德哲学(とりわけカント倫理学)に対して同時に遂行する批判と救済という二つのアプローチの帰結として理解すべきなのである。したがって、「新しい定言命法」をめぐるアドルノの(先に引用した発言を含む)一連の発言は、道德哲学の批判と救済をめぐるアドルノが提示する議論を踏まえて読むほうが効果的である。このことを示し、以下の本論での議論の方向性を定めた(4.0.2「新しい定言命法」をめぐる問題とそれに対するアプローチ)。

#### 4.1 規範性の問題

第一の準備作業により規範性の問題の輪郭を描いたのち、この問題に取り組むために、本論文は近年フライアンハーゲンが提出した否定主義擁護論証を検討した。フライアンハーゲンは、規範性の問題に明確な定式化を与えることで、吟味すべき導出ステップの所在を示し、そうして規範的主張と否定主義のいずれをも放棄することなく規範性の問題に対応する道を提案した。フライアンハーゲンの否定主義擁護論証の核にあるのは、「善の構想に訴えなくても規範的主張を正当化することができる」というテーゼにある。このテーゼは、本論文が第 1 章で再構成したアドルノの概念論とも整合的であり、検討に値する。このことを示すために、まずはフライアンハーゲンの議論を再構成した(4.1.1「規範性の問題をめぐるフライアンハーゲンの議論」)。しかしながら、フライアンハーゲンの議論は、詳細で検討に値するものではあるが、否定主義擁護の内実および「苦しみ」概念の理解のしかたについては解釈上同意できない点がある。否定主義擁護の内実の理解は、アドルノの道德哲学批判をひとつの理論構築として理解するかどうかにかかわる論点である。本論文は、アドルノの議論を、道德哲学理論を個別的状況から切り離して自己完結させる考え方に対する批判として理解する。その背景にあるのは道德的個人主義批判および道德哲学的概念の(相対化ではなく)継承のための歴史認識であり、さらに、カントを批判しつつ継承する基礎づけ不可能性の論

点である。このことを示し、それによって同時に次節以降のアドルノ読解のための道筋を与えた(4.1.2「フライアンハーゲンの議論へのコメント」)。

## 4.2 道徳哲学の自足性批判

《よさについての弁別的基準なしに規範的主張ができる》という主張を引き受ける点で本論文は否定主義を擁護する。しかし、それはよさについての弁別的基準を与える道徳理論に代わる新たな理論の構築のためではなく、道徳理論の自己完結性を反省するためである。このことを示すために、本節ではアドルノの道徳哲学批判を道徳哲学の自足性の仮象批判として再構成した。

道徳哲学の自足性の仮象ということでは考えられているのは、道徳哲学理論を具体的で個別的な状況や対象とのそのつどの関係に対する敏感さをもたずに筋道立てて組み立てることが可能であるという見かけのことである。したがって、この仮象に対する批判として、道徳哲学の問題をめぐるアドルノの議論は、社会的文脈に対して敏感でありながらそれに対する批判的省察をも可能にする道徳哲学の構想として提示される。

議論の筋道は以下ようになる。まず、アドルノは批判対象として、自足的・自己完結的道徳哲学の構想を取り上げる。そこで中心的に論じられるのはカントの道徳哲学である。アドルノがカントに取り組むのは、カントの道徳哲学こそがまさしく自足的・自己完結的道徳哲学の構想の徹底した具現化であるからだ。

以上のように批判対象を定めたうえで、アドルノの道徳哲学批判の議論を以下のように再構成する。まず、《唯一の道徳原理としての理性》というカントのアイディアの検討から議論を始め、そこからカントが要求する《理性の首尾一貫性》とアドルノが要請する《理性への反省》の対比を導いた(4.2.1「理性の首尾一貫性ではなく理性への反省」)。ついで、アドルノの議論を個人主義批判と特徴づけた(4.2.2「個人主義批判」)。さらに、この批判が没歴史的にではなく特定の歴史認識を背景にしていることを明示し(4.2.3「道徳哲学批判の背景としての歴史認識」)、最後に、《道徳法則の基礎づけ不可能性》の論点を取り上げた(4.2.4「基礎づけ不可能性——カントに抗してカントから継承する論点」)。興味深いことに、この最後の論点において、アドルノがカントを批判するポイントとそこに真理を見出すポイントは一致している。この論点は次節で取り上げる「新しい定言命法」の内容にかかわる。

## 4.3 新しい定言命法

以上の議論を踏まえて、「新しい定言命法」の内容理解のための考察を行った。まず、「新しい定言命法」の内容確認し、論点を明らかにした(4.3.1「新しい定言命法」の提示と論点の明確化)。「新しい」と「定言命法」という一見して両立困難な二つの表現の連言を、前節のアドルノの道徳哲学批判(および継承)の議論と整合的に理解することが本論文の提案である。なぜ「新しい」のか、という第一の問いに対しては、道徳哲学の自足性の仮象批判、とりわけその背景にある道徳的個人主義批判(4.2.2)および歴史認識(4.2.3)の観点から理解し、なぜ「定言命法」なのか、という第二の問いに対しては、アドルノがカントに虚偽と同時に真理をも見出した基礎づけ不可能性の論点

(4.2.4)から理解する。

ついで、前節では主題にならなかった「苦しみ」概念がアドルノの道德哲学のなかで果たす役割を明らかにするために、まず身体的なものの認識論的扱いをめぐるアドルノの議論を確認した(4.3.2「身体的契機への訴えによる自足的認識論批判」)。そこで本論文は、自足的な認識論の批判および身体的契機がそこで果たす役割を説明した。そこで示されたのは、アドルノが身体的なものの還元不可能性に依拠して、自足的な認識論は感覚を正当に扱えないという点を指摘していることである。

さらに、ここで議論が認識論から道德哲学へと移行していることを指摘し、身体的契機と批判的契機の関係についてのアドルノの発言を讀解した(4.3.3「身体的契機と批判的契機の収斂」)。そこで指摘されたのは(苦しみと実践の相互リマインド関係)である。この相互関係を規定するのは、道德的原理や善の構想という観念ではなく、苦しみの感覚でなければならない、という点にアドルノの主張の力点がある。なぜなら、苦しみはその許容限度が私の身体によって私の意のままにならないかたちで定められているものであるからだ。この点は、道德的な正しさの感覚との際立った違いである。道德的善は私の身体上の条件によっては限定されない。そして、私の身体に限界をもたないものに依拠するならば、自足的な理論構築の運動が始まることは避けられない。というよりはむしろ、私の身体に限界をもたないものに依拠することで、はじめて自足的な知的活動が可能になる。アドルノは、そのようにして生じる自足性の帰結に敏感であったがゆえに、その許容限度が私の身体によって私の意のままにならないかたちで定められているものに訴える必要があったのだ。

最後に、道德哲学上のアドルノの主張が自足性批判という消極的テーゼにとどまらないことを示すために、アドルノにおける「衝動」の概念の解明に取り組んだ(4.3.4「実践的認識能力としての衝動」)。衝動という概念には、まずは道德理論構築に対するネガティブ・テーゼという含意がある。しかしそれだけではなく、衝動はある種の認識能力として理解される。それはすなわち、衝動に捉えられることはある特定の状況下でその状況のある特定の特徴に反応することと不可分であり、問題となっている特徴の認識を共有しない観点から合理的熟慮のみに依拠してその衝動の内実を説明することはできない、ということである。さらに、そこで反応される状況の特徴は、積極的な指令を与えるのではなく回避すべき事態を告げ知らせるものとしてせり出してくる。ここで役割を果たすが、その許容限度が私の身体によって規定されている苦しみである。これらの点から、衝動とは、《そのつどの具体的状況のなかで回避すべき事態がせり出してくるようなしかたで現場に関与することで発揮される認識能力》として理解することができる。このように理解された衝動概念は、「アウシュヴィッツが繰り返されないように、またそれと似たことが起きないように、自らの思考と行為を調節せよ」という「新しい定言命法」の内実を示している。